

# 豊田市民芸館だより

第30号



蓬萊文箱 蓋

## 目次

- ・民芸の森の秋 ..... 2頁
- ・特別展「柳宗悦と古丹波」開催報告 ..... 3頁
- ・企画展「植物文様と民芸」資料紹介 ..... 4頁
- ・『豊田市名誉市民 本多静雄古陶磁コレクション目録』を刊行 ..... 5頁
- ・令和3年度展覧会案内 ..... 6頁
- ・民芸館からのお知らせ ..... 7頁
- ・資料紹介 ..... 8頁

# 民芸の森の秋

## 森のアート展 あとあとのいまー猿投窯エリアの作家たち 令和2年9月19日(土)～10月11日(日) 入館者：476人

地元豊田市のアートユニットSHIMAYAGI ART（代表：山岸大祐氏）の企画で、周辺に広がる窯業生産地の源流ともいえる古代の猿投窯が広がっていた地域において現代に活躍する屋我優人（瀬戸市）・望月美鶴（長久手市）・横田典子（豊田市）の3名の陶芸作家の個性的な作品を紹介しました。9月19日には、3名の作家によるアーティストトークを実施し、参加された皆さんは、それぞれの作家の作品解説や作陶の想いに耳を傾けていました。

旧海老名三平宅の前でアーティストトークに聞き入る参加者たち



## 森のアート展「紫乃～murasakino～アクリル画展あなたも わたしも アーティスト」 令和2年10月24日(土)～12月6日(日) 入館者：888人

豊田市出身の紫乃～murasakino～による自然の中で感じた目に見えないものをアクリル絵の具を使い色に変換するような感覚で、キャンバスだけではなく、無垢の板・布などにも自由に描いた作品を展示。ぷらっと散歩に訪れる感覚でアートに触れてみるという志向で、建物の中だけではなく、森の中にも展示しました。11月3日にはギャラリートークとワークショップを行い、18人の参加がありました。プラ板を用いたワークショップでは小さなお子さんからご年配の方までの参加があり、熱心に取り組んでいました。

市指定文化財の旧海老名三平宅内の展示風景



## 民芸の森観月会 10月31日(土) 参加者：168人

民芸の森で満月に近い週末の夕方に月見の会を開催しました。今回はNPO法人民芸の森倶楽部へ運営委託をして行いました。会場では、森の中にオリジナルの竹行灯を灯し、笙や二胡などの舞台演奏や俳句展示などを鑑賞して、秋の夕べを過ごしていただきました。

台風の接近により中止になった昨年と違い今年は天候に恵まれ、会の後半には見事な満月が夜空に輝き、足元に灯された竹行灯とともに、お越しいただいた方の目を楽しませていました。

夜間の幻想的な雰囲気の中行われた  
狂言舞台での演奏



## 勤八峡紅葉ウォーキング～勤八峡の橋を巡る～ 11月15日(日) 参加者：320人

民芸の森を発着点として越戸ダムを渡って勤八峡を一回りする約4Kmのコースを巡りました。平戸橋1区・平戸橋いこいの広場・中部電力愛知水力センターなど、地域の皆さんの協力をいただいて実施し、普段通行することのできない越戸ダムからの景観を楽しむなど、天候にも恵まれて、多くの方が参加しました。参加者たちは5ヶ所のチェックポイントに隠されたキーワードを見つけながら思い思いのペースでゴールを目指していました。

前田公園のチェックポイントにて  
色づいた紅葉を見上げる参加者たち





# 特別展「柳宗悦と古丹波」開催報告

今回の特別展「柳宗悦と古丹波」は、当初の展示計画では2019年9月から11月に日本民藝館で開催されたものを再構成して、日本民藝館の所蔵品と兵庫県の丹波古陶館の所蔵品を合わせて、2020年9月～12月の会期で特別展を開催する予定でした。コロナ禍による社会情勢から変更せざるを得なくなり、展示する作品構成と展覧会の会期の見直しをすることになりました。会期については2020年11月～2021年2月とし、構成内容については、日本民藝館の所蔵品で再構成し、それに加えて豊田市民芸館蔵の丹波焼の古陶を展示することになりました。

まず、丹波窯の概要を紹介します。日本遺産にも認定された「六古窯」の一つである丹波窯は、兵庫県篠山市に所在し、平安時代末期～鎌倉時代初頭に在地の土師器・須恵器窯などの技術基盤に、瀬戸・常滑の窯業技術が移入されて成立したと考えられています。その後は地理的に備前窯に近いことから備前系の技術を継続的に受け、そして江戸時代の初め頃には朝鮮系の技術を、江戸時代後期には京焼系の意匠・技法などを受け入れて、現在に至っています。

これまでに知られている丹波焼の製品をみていくと、中世のものは、褐色に焼き上がり、淡緑色の自然釉がかかったものが多くみられます。江戸時代の初め頃からは登窯の時代に入り、基本的には轆轤成形・施釉が主体を占めています。灰釉・赤土部釉を中心に、葉文・貼付文・釘彫文といった装飾が施され、四耳壺・桶・甕など、独自の文様をもつ生活用具が見られます。江戸時代後期になると、良質の土を使い、鉄釉や黒釉・透明釉、白の化粧土などが用いられています。また、筒描・墨流・鉄絵といった技法を用いた新たなものが作られていきました。

今回の展示では民芸運動の創始者で思想家の柳宗悦が丹波焼と出会い、丹波古陶館の中西氏との出会いによって丹波焼に魅せられ、蒐集に傾倒し、そして晩年に自然釉の古丹波に見られる人の手によるものではない自然のなせる業・美にたどり着くまでを辿って、甕・壺を中心に多様な丹波焼約100点を展示しました。また、それにあわせて豊田市民芸館収蔵の丹波焼の甕・壺6点も展示しました。

来館された方のアンケートでは、中世の大型の壺・甕や江戸時代中期の魚文・葉文の甕、江戸後期の流釉の蠟燭徳利などに興味を持たれた方が多かったようです。

また、付帯事業としては、11月21日と1月30日に展示解説のギャラリートークを、11月14・15日に丹波の土を含んだ粘土による作陶と穴窯の焼成体験の講座を実施しました。



第1民芸館展示室



第2民芸館展示室



蠟燭徳利

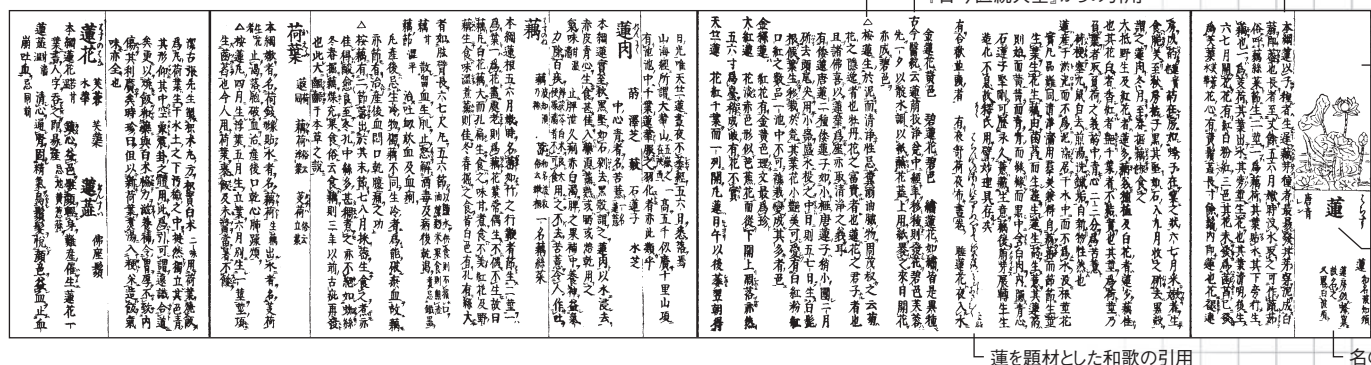
# 企画展「植物文様の民芸」資料紹介

令和3年3月9日（火）～8月29日（日）の間、企画展「植物文様の民芸」を開催します。この展覧会では、大輪の菊が描かれた石皿や、雲のように淡く広がった桜と紅葉の色絵が美しい播鉢、赤絵の蓮があざやかな香炉など、植物文様で装飾された民芸品を展示しています。手仕事が盛んであった江戸時代において、器物に取り入れた植物をどのように認識し、どのような意味を込めていたのか、今回は江戸時代中期の図説百科事典であり、項目数の多さでも知られる『和漢三才図会』の挿絵とともに紹介します。



『和漢三才図会』は大坂の医師・寺島良安が正徳2年（1712年）に脱稿し、刊行された日本で初めての図説百科事典です。明の王圻の『三才図会』（1607年刊）に倣って、和漢古今にわたる事物を天・人・地の3部105部門に分けました。各項目を図・漢名・和名で示し、『本草綱目』（1596年に刊行された中国の本草書）などの諸書の説と良安自身の考察が記載されています。

東京美術『和漢三才図会（上）』



## 蓮華文香炉（岐阜・美濃）江戸時代後期

『和漢三才図会』の蓮の絵の下、和名の左には、「蓮の房が蜂の巣に似ているので蓮という。略して蓮という」と名の由来が書かれています。諸書の紹介では『本草綱目』『古今医統大全』を挙げ、『本草綱目』には花や実、蓮根についての描写や、蓮の茎で穴を塞ぐと鼠は近づかなくなり、蓮を煎じたお湯を洗うと新品同然になる、などと性質の記述があります。また、花は心を鎮めて血色を良くして顔を老けさせず体を軽くする、難産のお産を早めさせるには花に人という字を書いて飲ませるとお産が容易になるとお産が容易になるとあり、北宋時代の学者・周茂叔は、「菊は花の隠逸なるものである。牡丹は花の富貴なるものである。蓮は花の君子なるものである」といい、文中以下に「蓮は泥から生え出るのが清浄で、もともと、糞溺や油膩物を嫌う」「諸仏は喜んで蓮華に坐するが、これも蓮華が清浄なものである」ところからである」と良安の意見を述べています。

下の写真、資料の筒形の香炉には、削り高台の外側に、自立するには程遠い簡略化された飾り程度の三足が見られます。胴には御深井釉のような透明度の高い釉薬が掛けられ、その上に緑色の上絵、正面には赤絵の大振りな蓮の花が描かれています。裏面には飛雲文が赤絵で大きく描かれ、その周囲には緑色の上絵具を丸に抜いた中に黒色の三つの点を散らした文様も見られます。仏教において極楽浄土の象徴とされる蓮華文と瑞雲が飛び行く様子の飛雲文は、重要な仏教法具である香炉に相応しいといえましょう。また、本来は神仏等に供える供香として用いる香炉ですが、この資料には金属製の火屋が付属しており、空香として用いる仕様になっています。



口径6.5cm、底径7.0cm、高さ5.3cm 表側



裏側

(岩間千秋)

### 参考文献

- 『多治見の古窯第3号 第2版「美濃窯の焼物」』多治見市教育委員会 1993
- 『特別展 美濃の香炉』瑞浪陶磁資料館 2001
- 『角川日本陶磁大辞典 普及版』角川学芸出版 2011
- 『和漢三才図会』東京美術 1995
- 『和漢三才図会16』平凡社 1990



# 『豊田市名誉市民 本多静雄古陶磁コレクション目録』を刊行

《A4版 47頁 1,000円》

## 名誉市民 本多静雄氏

1977年に豊田市名誉市民になった本多静雄氏（1898～1999）は、電気通信事業と科学技術の向上に献身するとともに、日本有数の古陶磁研究者として陶磁器の研究に取り組みました。特に「猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）」の発見者としても知られ、貴重な資料や出土品の収集、研究により郷土文化の発展に貢献しました。

本多氏の古陶磁コレクションは、自邸内のレンガ積み収蔵庫2棟等に保管されました。これらのコレクションを広く公開したいと考えた本多氏は、毎年春に自邸で多くの人を招待し「陶器と桜を観る会」（観桜会）を開催したのです。

## さなげ古窯本多記念館と本多コレクション

本多氏の古陶磁コレクションは、豊田市民芸館（1983年開館）のある平戸橋公園の一角に1980年、豊田市により「さなげ古窯本多記念館」で公開されるようになりました。記念館には、国重要文化財「猿投灰釉多口瓶」を始めとした猿投窯の発掘資料、渥美窯の資料、瀬戸や常滑などの六古窯の壺など、完形品だけでなく陶器片も含め2つの部屋に展示されました。

ところが、1994年に愛知県瀬戸市にある愛知県陶磁資料館（現・愛知県陶磁美術館）が全館オープンすると、同館の建設委員も務めた本多氏は、国重要文化財「猿投 灰釉多口瓶」を始めとした猿投窯の発掘資料などを愛知県陶磁資料館に移管されました。そして、展示スペースは1部屋のみとなり、もう1部屋は、現在豊田市民芸館の事務室として使用しています。

さらに、本多氏は晩年、自身のコレクションを豊田市始め、ゆかりのある博物館等へ寄贈しました。また、最晩年には、若手陶芸家の育成基金を創設するため、コレクションの一部を手放したといわれています。

## 寄贈のエピソード

本多氏が“幻の壺”と命名した「渥美 蓮弁文壺」（豊田市指定文化財）が見つかった足助町（現・豊田市）への寄贈をした時のお話です。本多氏はこの壺だけでは寂しいだろうからと、お供として常滑壺1点も寄贈したそうです。何とも心温まるお話で、本多氏の壺に対する思いが伝わってきます。また、当時の足助町も本多氏の意を汲み、この2点を横並びにして常設展示しました。その姿は、現在も足助資料館で見ることができます。

## 本多コレクションの寄贈について

本多静雄氏は、晩年、自身のコレクションをゆかりの地へ寄贈しています。これは、本多氏が東邦産業研究所理事長の時（1944～45年）、同研究所を設立した電力の鬼といわれた、松永安左エ門氏との交流による影響だとこれまで考えていました。松永氏は晩年、自身の古美術品を東京国立博物館等へ寄贈していたからです。しかし、最近これだけではないと思うようになりました。それは、本多氏の父・松三郎氏が困っている人を助けていたこと、土木建設業で財を成し、前田公園を作った前田栄次郎氏の地元への消防自動車の寄附や学校給食の支援等、井上農場の井上徳三郎氏の篤志などの郷土の偉人や、豊田市という風土も大きく関係していると思うようになったからです。

## 古陶磁コレクション目録の刊行

今回の『豊田市名誉市民 本多静雄古陶磁コレクション目録』刊行は、本多氏の古陶磁コレクションの全容に迫ることを目的としています。

このため、豊田市民芸館が所蔵するコレクションのほか、参考として豊田市民芸館以外の博物館等が収蔵している資料も分かる範囲で掲載しました。目録から本多氏の収集が、猿投窯のほか六古窯、陶磁のこま犬、外国陶器など多種多様であること、そして陶器片も対象であることが分かります。

今後も本多静雄コレクションの調査を進めていきますが、掲載の資料について、お気づきの点や目録に掲載した資料以外にもご存知の方はお知らせいただければ幸いです。

（児玉文彦）



# 令和3年度(4月～令和4年3月)特別展・企画展 展覧会のご案内

## 企画展『植物文様の民芸』 第1・2民芸館

3月9日(火)～8月29日(日) <観覧料 無料>

牡丹文を貼り付けた半胴甕、大輪の菊模様が美しい石皿など、様々な植物をモチーフに取り入れた民芸品は多くあります。これらの民芸品の多くが盛んに作られていた江戸時代では、それぞれの植物をどのように認識し、また、どのような意味や祈りを込めて描いたのでしょうか。江戸時代中期の図説百科事典であり、同時代に発行された絵入り事典として圧倒的な項目数を持つ『和漢三才図会』の挿絵とともにやきもの、染織などの民芸品を約250点展示紹介します。



蓮華文香炉(岐阜・美濃)

## 豊田国際紙フォーラム『IAPMA展』 第1・2民芸館

9月7日(火)～10月17日(日) <観覧料 無料>

豊田市で開催される国際紙フォーラムに合わせ、世界中から応募のあった「紙」を主体としたアート作品のうち、国際紙フォーラムが選定した優品を展示します。(IAPMA = The International Association of Hand Papermakers and Paper Artists)

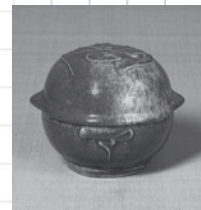


2018年 IAPMA展(ブルガリア)

## 特別展『柳宗悦と民芸運動の作家たち』(日本民藝館巡回展) 第1・2民芸館

10月26日(火)～1月30日(日) <観覧料 有料>

日本民藝館の創設者・柳宗悦(1889～1961)は、陶芸家の河井寛次郎、濱田庄司と民衆が用いる日常品の美しさに注目しそれらに「民芸」という言葉を冠しました。そして1936(昭和11)年の日本民藝館開館以来、新旧の民芸品とともに、民芸運動の作家による作品を常に展示してきました。本展は、日本民藝館創設80周年特別展の1つとして平成28年度に日本民藝館で開催された展覧会を再構成し、柳の思想に共感し柳と共に民芸運動を推進した作家たちの作品を展示紹介します。



辰砂筒描食籠  
河井寛次郎

## 企画展『新収蔵品展』 第2民芸館

### 同時開催『館蔵 手仕事の優品展』 第1民芸館

2月8日(火)～5月29日(日) <観覧料 無料>

当館では民芸の普及・啓発のため、日頃より優れた資料を収集しています。今回は平成26年度から令和2年度に収集した資料のうち、これまでに展示していない資料を紹介します。

《主な展示資料》

日本民藝館展の優品、土人形やこけしなどの郷土玩具、衣焼などの陶磁器、編組品、有松・鳴海絞りなどの染織品、手漉き和紙など



絞り染め浴衣(部分)

## 民芸館ギャラリー(第3民芸館)のご案内

令和3年

3月23日(火)～6月13日(日) 令和2年度民芸館講座作品展

6月19日(土)～8月1日(日) (仮)福を呼び込む大漁旗展

8月8日(日)～8月29日(日) みんなの作品展

9月7日(火)～10月17日(日) 日本の紙と世界の紙展

10月26日(火)～11月28日(日) (仮)柳宗悦と民芸運動の作家たち(館蔵コレクションより)

令和4年

12月4日(土)～2月6日(日) 郷土玩具展 干支と寅

2月22日(火)～5月22日(日) 令和3年度民芸館講座作品展

この展示案内は、年間計画のため今後日程・内容等が変更となることがあります。



# 民芸館からのお知らせ

※新型コロナウイルス感染症の影響で内容が変更になる場合があります。

## ①平戸橋桜まつり2021を開催

4月3日(土)雨天決行 午前10時～午後3時

### ◆民芸館を含む平戸橋公園会場

野外ステージや食品バザー、クラフトショップ、民芸館講座体験、こども園による絞りの作品展示、写生大会、スタンプラリー等

### ◆民芸の森会場

森の市(食品販売やクラフトショップ)

「豊田市民俗芸能祭」午後

石野お雛子保存会、杉本棒の手保存会、西山万歳保存会、藤沢水神雛子保存会



こども園絞り染め作品展示の様子

## ②春の勘八峡 桜ウィーク

3月20日(土)～4月4日(日)

桜の開花にあわせて上記期間にさまざまな催しを行います。

### ◆茶室 勘八亭の平日営業(月曜日は休業、通常営業は土日祝日)

時間：午前10時～午後4時 料金：一服400円(菓子付)

### ◆民芸館・民芸の森・平戸橋いこいの広場の3館を見学しよう!

「民芸館・民芸の森ウォーキングマップ」に3館のスタンプを押して、民芸館ポストカードまたは民芸の森クリアファイルを手に入れよう!

スタンプの設置場所は、民芸館(第3民芸館)と民芸の森(田舎家)、平戸橋いこいの広場(受付)です。

時間：午前9時～午後4時30分 入館：無料



平戸橋公園内の桜

## ③絞り染めこいのぼりの展示と絞り染めこいのぼり作り

新緑ウィーク期間中(4/24(土)～5/9(日))絞り染めこいのぼりを展示します。

また、絞り染めこいのぼり作り体験も実施します。

### ◆こいのぼりの展示

期間：4月24日(土)～5月9日(日)

会場：第3民芸館前、民芸の森

### ◆絞り染めこいのぼり作り

日時：4月25日(日)13時～15時

会場：陶芸資料館1階染色室

参加費：1,400円(中学生以下1,200円)

対象・定員：3才以上・12名

申込み：往復はがきかホームページの

講座申込フォームで(4/8必着)、詳細は民芸館へ



絞り染めこいのぼり作り

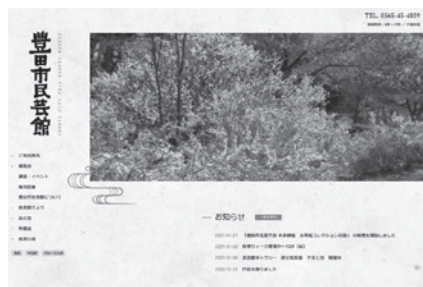


民芸の森でのこいのぼり

## ④ホームページをリニューアルしました

豊田市民芸館のホームページをリニューアルしました。これに伴い、講座やイベントの申込み方法は従来の往復はがきに加え、メールフォームからの申込みも可能となりました。ホームページの講座・イベントの項目をご覧ください。

<http://www.mingeikan.toyota.aichi.jp/>



新ホームページ



# 資料紹介 有松・鳴海絞

## 新収蔵資料 有松・鳴海絞「亀甲文白影絞」浴衣・「疋田三浦絞」浴衣地

「絞り染め」は糸で括ったり縫うことで防染（染め残したい部分に染料が入ることが防ぐ）する染色技法として古くから世界各地で行われてきました。日本では正倉院に絞り染めを施した布が残されていますが、現在まで続く産地として私たちに身近なのは現在の名古屋市緑区に伝わる「有松・鳴海絞」ではないでしょうか。有松・鳴海絞の起源は、江戸時代の慶長年間（1596～1615年）に、名古屋城築城のために豊後国（現在の大分県）より来ていた者より伝えられたとされています。そして東海道の宿場町として栄えたこの地域の特産品としてその名を馳せたのです。

現在、有松・鳴海絞として伝わる絞りの技法は100種を超えられていると言われています。昭和32年に国の無形文化財、そして昭和50年には伝統工芸品としての指定を受けた「有松・鳴海絞」の技は伝統工芸士によって守られ受け継がれています。写真右の浴衣は昭和59年に伝統工芸士の認定を受けた故濱島とみさん（明治39年生）が白影絞りの技法を施し染められたものです。明治から大正にかけて流行した白影絞りは、防染技法としての絞り染めの一般概念とは逆に、地白で絞りのところだけが染められる技法で、縫い方や染色方法が複雑で難しく見た目より手間がかかるため最近ではこの絞りができる人はほとんどいないと言われている貴重な技です。

また写真下も濱島さんが絞りを施した布でとても細かい疋田三浦絞りの技法が使われています。この絞り布は糸抜きが途中までしかされていないため、その細やかなくり絞りの技を見ることができる貴重な資料です。



亀甲文白影絞浴衣 桁64cm、丈155cm



疋田三浦絞浴衣地(部分)

令和元年5月に「江戸時代の情緒に触れる絞りの産地 ～藍染が風にゆれる町 有松～」として文化庁の日本遺産にも認定された有松は、町並みが重要伝統的建造物群保存地区にも指定されており、伝統を受け継ぎつつも新しい挑戦をし続けている町だと思います。

今回ご紹介した新収蔵資料はいずれも昭和20年代に制作されたものです。白影絞りは資料収集後、浴衣に仕立てたことで、模様連続性や凛とした美しさを一層感じる一品となりました。来年度の企画展の中で展示紹介する予定ですのでどうぞ楽しみにしててください。

(内田美穂子)

参考文献：『鳴海絞』昭和54年 鳴海絞商工協同組合発行

### お問い合わせ 豊田市民芸館(豊田市生涯活躍部文化財課)

〒470-0331 愛知県豊田市平戸橋町波岩86-100

TEL 0565-45-4039 FAX 0565-46-2588

休館日 月曜日(祝日の場合は開館)

開館時間 午前9時～午後5時

入館料 無料(特別展は有料)

<http://www.mingeikan.toyota.aichi.jp/>

### 豊田市民芸の森

〒470-0331

豊田市平戸橋町石平60-1

TEL 0565-46-0001

